

話題あれこれ

火とあかりの昔

くわわってきた人々のくらし
厚木市郷土資料館では、2月28日まで、
第46回収蔵資料展「火とあかりの昔」を
開催しています。



去年は電気
のない暮らし
についての展
示でした。原
発事故の後だ
けに、電気の
無かった時代
と現在とを比
べて、いかに
便利になった

か、なりすぎたか、展示資料の現物を見
て知ることができました。

今回は「火」です。照明、調理、

暖房などの道具が展
示されています。



照明器具でもいろ
いろあって、松明、
行灯、提灯、ランプ
などなど。調理に使
うは七輪、へっつい、
鍋釜、氷式冷蔵庫。
暖房では火鉢、炭入
れ、灰かき、十能。

他にも鹽(たらい)に伸子針、ひのし、
鋤(こて)。

こうして見ると、今の私たちが電気
に頼り切っていることが良くわかりま

す。

実物を見ると、あの小説に出てきたの
はこの行灯かなどと得心。菊池寛の小説
「藤十郎の恋」で絹行灯を吹き消す場面
がありますが、どんな行灯だったのかと
想像するも楽しい。



知らない人はもちろん、知ってる人
には懐かしい昔の道具
を見に、郷土資料館
へ行ってみませんか。
ついでに、原発再
稼働を狙う電力会社
のあくどさも考えな
がら、さらに大量消
費社会への反省もし
て、生活を見直して
みましょうね。

話題あれこれ

『ぶらり日本全国』『語源遺産』の旅

「銀ブラ」とは、銀座でブラ・・・

著者のわぐりたかしさんは放送作家
で『語源ハンター』。言葉の語源につ
いて、その掘ってきた土地に行き、
語源のもとを探る。副題には「行っ
て、見て、触れる」とある文字通りの
現場主義者。

神奈川県にゆかりのある語で「こた
ごた」は建長寺の坊さんの名前から。



「急がば回れ」
は琵琶湖を渡る
ときに、危険だ
が船で行くか、
時間をかけて歩
くのがいいかの
思案から。「や
ぶ医者」は名医
だった。

著者の興味と
関心は尽きるこ

とがありません。ここぞと定めて勢い
こんで語源探しに行っても、空振りにな
ることもある。それでもあきらめず
に、かすかな手がかりを頼りに、再度
挑戦する。一つの語源を探していった
ら、別な語源も発見できたこともある。

「折り紙つき」と「太鼓判」。

「銀ブラ」は、実は見当違いをして
いる人が多いという。銀座をぶらぶら
歩くのではなく、銀座まで歩くことだ
という。しかもそのルートも決まってい
た。三田の慶応義塾から芝公園、芝
増上寺、新橋停車場、最後に銀座方
パウリスタに向かう。ここでブラジル
コーヒを飲んで「銀ブラ」が完結。
当時、慶応では三田文学を久保田万太
郎、児島政二郎、佐藤春夫などが主宰
しており、文学談義が花開いたことで
しょう。

この本を読むと言葉に対する興味が
増してきます。語源探しの最後にはそ
の地のおいしいものの紹介があり、現
地に行ってみたくなる本です。

日本の水は・・・

里地里山フォーラムで、進士五十八
氏の話を聞きながら、富山和子著「水
の旅 日本再発見」を思い出しました。

富山和子さんは、日本全国、世界各
地の水を見て回ります。「お堀の水は
どこから」「森

林は海の魚を養
う」「阿蘇の水
を作る話」「人

工河川」「名木
と酒とスギ」

「アジアのダム
と森林」等々。

現地へ赴き、



営林署や地元の古老から話を聞きます。
歴史をひもとくとき、神代の時代から江戸
時代、明治、現代と人がいかに水に悩
み、制御するために苦心してきたかが
よくわかります。

富山さんは「水と緑と土は同義語」
といっています。森林が水を蓄え、植物を
育む。それは海とも深いかわりがあ
ります。

林業は漁業を助け、その漁業は農業
を助け、それによって農業は林業を支
えているのです。その循環の流れがど
こかで滞ったら、日本の水も農業も林
業もおかしくなってしまう。

この本は一九八七年初版本を文庫化
したものです。現在は、当時以上にこ
の指摘の重要性が増しています。



2月の法律相談

2月19日(水)

13時

前日迄の連絡を
お願いします。